



昭和九年三月十日發行

通巻第三十三号

新雪 スキー行

五色合宿訪問記

大正天皇祭から日曜への二日続きスキーマの初乗りをやらうと針葉樹會のOB共が謀議を凝してゐると、学校の今年の合宿は北海道へ押渡る道中のために五色になったといふニコースがあったので五色行とさまた。一行は中川、松木、近藤の定連に増山の新進兼新頼を加え、奥羽線三等寝台に枕を並べて乗り込むことになったのである。合宿への御土産買入係のコンチヤンが會社のインテキ晝食に中毒つてアハハ腸まぐ下らうといふ物凄下痢を起し、豫定の半分も買えず、それでも早おじて汽車には間に合つた。板谷近くにかゝると相當な雪だ、一米は確にある。勇躍下車するにはしたが、まだ五時前、暗さは暗し、迎えに来る筈の現役連も却々来さうにないから、暫く油を売つてから出かけた。松木が一度来たことがあるとい

つて心得頼にゆくのであとについて吞氣に行く。どうやらクリスタの下塗が利きすぎで、雪だるまスキーになりさうな様子だ。天気だったら家形山まで行こうといふプラン（実にプランズに終つてしまった）なので雪空なののが氣にかゝる。橋を渡って電光形の急坂にさしかゝる頃、夜は殆んど明け放れ、青空さへ時々見える。問題のクリスタは俄然其悪性を發揮してカマボコ形にいた雪は二度や三度こすった位では到底落ちず、アザラジ連にも優る確実（？）さで登れたのはどうかと思つた。もう宗川旅館が目前に迫つたゲレンデの途中まで来ると、学生軍の頭目好漢堀岡荒次郎君が小気味よいクリスタやニヤで一行を迎えてくれた。先輩達が来るのにサービスが悪かつたら御土産を呉れまいといふ心配から、早朝にも不拘此歓迎なんださうである。

さて一行は好漢の威嚇（宿屋の帳場に対する）美筆奏功した、知事様御用といふ床の間、違棚付の特別室におさまつた。（此室、一泊五食付一月五十銭也）合宿と同値りで持遇も亦最上級だったので、僕等の帰つた後、合宿中の物議の種になつたさうである。朝食をすまして学生有志と青木小屋迄といふプランで九時半出発（朝一寸晴れた

空は忽ち吹雪に変わってしまった。降り男林君が合宿の皮切りをしてくれた御蔭で新雪ながら相當の雪量だが、ブツジユはまだ大分頭を出してゐる。学生軍のラッセルで塞の河原まで登ると、さすが聞えた風の名所だけあって右手から凄じい勢で粉雪を吹きつける。杖の先にまで風圧を感じながらも、一行十八名無事通過すると、ルート右山に変わって俄然風は無くなったが、雪は愈々深く、膝まで潜るラッセルになつてしまつたので遅々として進まず、青木小屋もどうやら怪しくなつてきた。十二時、左手の凹地に小屋を見出してスキーを脱ぐ。殺下（？）小屋といつて六華クラブ所有の新らしい小屋だ、廣さは五坪もあらうか。ストーヴは忽ちパチ／＼と燃え上つて晝食だ。ラッセルに思はぬ時間をとられた上に此大部隊なので青木小屋を断念、其代り小屋裏のスロープにゲレンデ表造を始める。此辺雪量一米五〇、可成な粉雪で一度転んだら最後暫くは姿が見えなくなる。全員七転八倒の奮闘の甲斐あつてどうやら平になりかゝると早、午後二時、冬の日脚の何とやら帰りの程もと堀岡主将が案じるので、全員を三班に分けて帰途につく。

「合宿も科学的に、親切に、しかし悪口を云へば意気地無しになつたね」

と近ちゃんが感心する。午前の難行に較べて帰りは増山の言を借りれば「道スキー」、スキーが道の通りに主人をのせて行つてくれる。塞の河原もまた、く間に過ぎて、ブツジユの多い夏路を、木の根、岩角にもさいなまれずどうやら無事に下つた。

其夜の官民イヤ先輩、現役合同の懇親會は実に盛大を極めた。新旧兵交ぜ三十何人といふ大一座だから、買込むとき近ちゃんが大汗かいたといふ東京土産も配つてみれば雀の涙、それでも五色の山の中ではソウトウなもんだった。型の様な自己紹介あつた後談愈々佳境に入つた折しも

「野沢の合宿でも屁は問題でしたか？」といふ珍問が發せられた一殺那「ブーッ」と一発先輩席に聲あり、忽ち此奇問に美事な解答を與えたのは大笑だった。九時目出度解散。

二十五日は学生十数人と再び塞の河原まで登り、スキーの練習を楽しんでから、一旦宿まで戻つて晝食、二時リユックを肩に五色に別を告げて山を下つた。私は宿を出て間もなくスキーを流して最後となり約二十分も遅れて皆に心配させた。五色橋の裾で別れる筈の見送の現役連は態々取まで送つてきてくれたのみか、汽車が動き出してからもスキッチバックのはづれのスノーシエツドのある

崖端に竝んで、杖をあげて私等の一行を見送ってくれた。

「今の学生はサービスがよくなったねえ」と感嘆する近藤の言葉をきながら、私はサービスなどという言葉では到底あらはすことの出来ない、温い懐しい気持ちで胸一杯にこみ上げてくるのを覚えた。一行は豫定の通り福島で途中下車して、飯坂温泉に終日の汗を流して再び福島に戻り一杯機嫌で、早朝工野着の列車に乗り込んだ。

(七兵衛)

外ノ川小屋スキー日記

(其一)

此のシーズンには五回出かける念願を立て、第一回は皆で五色温泉へ十二月の連休を利用して合宿を訪れ、久振りで学生気分に戻って来た。此度お正月の休みは外ノ川入と決めて同志を集めたが、誰もない。やっとの事で中川大先輩を見出したが、元旦は主人として是非家に居度いと云ふので銀行員の悲しさ三日迄の休だ一日もゆっくりしては居られない。一人で大晦日の夜行で出かけた。三十日から降り出した雪は止め度なく降る。元日の朝五時湯沢の駅を出かけたが誰一人登って来る者はない。昨日も余り下った者もないと見えて

道跡もなく軽い雪と言っても越後の雪だもの一尺五寸位じゃ一寸いやになる。雪は音もなく降る。風は一寸もない。耳に入るものははら／＼と上衣にかゝる粉雪の音だけだ。何たる静さだらう。芝原の村では早い家が二三軒雪踏みをしてるだけだ。

峠の下りは少しは滑るかと思つたら蹴頭敷尾歩いて下るんだからかなはない。八木沢の有馬屋で朝飯に餅を焼いて賣つてゐると前の家にも一人のお客さんが来た。慈恵医大の山岳部長ださうだ。雪の時には始めてだから一緒に頼むと云ふ候これじゃラッセルも頼めず、それでも相棒が居ると思へば気強い。九時半頃鉢巻峠にかゝった。雪は益々激しく降つて来る。歩き出してから最早彼此五時間だもの一尺位も降つたらう。

ハ―ハ―言ひながら頂上に着き後は平の様なものだ。時間がたてばたつ程登れば登る程多くなるわけだ。股までもあらうと云ふ雪だ。せめて下つて来る奴でもなからうかと心頼みにしてゐたが遂に一人も下つて来ない。この雪では下りにラッセルが必要なんだもの。小屋に着いた時は二時半になつてゐた。丁度小屋の前で慈恵の小屋から来た人夫に會つたが、ラッセルして下つて三時間しか

かったとの事だ。一寸も滑らず登りで一日費したのも瀧にさわるので坂川迄上つてみた。併し下りも大したスピードも出ずつたらぬ一日を無駄にした。併し良いことには誰も来る者が無い為此の日のお客様は私と先生だけだ。静に暖い夜を過ごすことが出来た。此処に是非申上げて置き度いのは相棒の先生だが、夕飯にはリュックからお酒を出した、そしてカラスミを海軍ナイフで切つて肴にしてゐるのだ。僕は密に考へた、うなづいて偉い奴が居るものだ。二日で帰る豫定だった自分には此の一日の無駄で三日に延して中川君の仕入れたコースにありつく事に決心して朝早く神樂ヶ峯に登った。慈大のヒュッテ迄は時間がかゝったがこれから上は慈大の連中が登った跡を難なく頂上に着いたが下りが滑らない。腰まで隠れて雪煙だけには猛烈に勇しいが、面白くない。併下ノ芝から森林帯に入つて来ると凄まじい。実に痛快の滑走だった。慈大の小屋の下で中川君に會ひ例の森林滑降で小屋に帰った。夜は凄まじい。一晩で保さんの持つて来たもの皆食つてしまふと云ふのだが霜降のコース、新巻、等々身動きもならぬ程食つた。

小屋の主人は東電の小鷹氏が亀戸の変電所に転勤させられてしまったので芝原村の老夫婦が女一

人雇つて飯を引き受けてやつてゐる。おやぢは少し耳の遠い人の良い男で女房にしかれてゐる。二人共人の良い奴で何の変わりもない。東電の小屋には相変わらず例の元氣のおやぢが居る。去年外ノ川小屋に居たおつさが今年も水電の小屋の冬期常備となつて働いてゐるので夜の話相手には変わりもない。今年の滑り納めに四月の初めにでも日帰りで神樂に行き度いと思つてゐる。

(三角)

(其二)

一月二日、グツスリ寝込んでフト眼がさめた正月二日の朝、車内がイヤに明るく、隣を見ては會社の反違は降りてしまつたと見えて影も見えない。ハテ何処かと窓から外を見れば、清水トンネルの入口土合でエンコしてゐる。小一時間も停つたらしい、定刻通りにゆけば、湯沢が六時だといふのに、こゝで早八時である。それ程の大雪が三十一日から一日にかけて降つたらしい。これじゃこつちが芝原峠へ登りつく頃は、松木は下の芝あたりへ行つてゐるだらうなどと考へながら食堂車で腹持をして湯沢で降りる。成程大雪だ、いつも線路に沿つて峠道へすぐ出られるのに今日は町を大廻りしてゆかねばならぬ。一人の連もない。勝手知つ

た峠道とて忘気に登ってゆくうちに七谷切のはづれでこれも単独行の外ノ川行の学生と一緒になつて八木沢まで一気に乗って有馬屋といふ、外ノ川小屋の八木沢出張所みたいな家スキを脱ぐ。こゝで運よく外ノ川小屋の兄弟と其友達の男の子の三人連と一緒になつたので頗る悠々と、難関ハ巻峠を登る。新雪ながら美事なラッセルだ（後で聞けば此シユポールこそ前日松木が八木沢から三時間もかゝつて悪戦苦闘の末つけた道だった）案に登って一時過ぎ小屋に着く。果して、松木は、後から来るやうにとの傳言をのこして神樂へ行つたとの報告だ。悠り晝食を攝ってから、慈恵ヒュツテあたりで會ふだらうと見當をつけながら柳の原始林の緩斜面を登ってゆくと、豫定通り慈恵ヒュツテの少し下で、降ってくる松木にパツタリ出會った。

「孫さんと一晩も一緒に寝ないとあっちや申訳ないし、ほら例の牛肉もあるだらう、だから今朝銀行へは電報打って貰ふて泊ることにしたよ」といふ嬉しい挨拶だ。實際こゝまで来てすれ違ひに帰ったんじや全くつまらないと出発以来そればかり気がかりだった丈に、本當に嬉しかった。去年は散々白銀の乱倒に悩まされた此林間滑走も、今日は楽に被川まで降って被川からは一回の転倒

も無しに小屋まで帰った。

一月三日 時間があつたら被川まで一緒に行こうと前夜は約束したのだったが、起きてから何の彼のと手間取つてゐるうちに九時過ぎになつてしまったので松木は湯沢へ、松子神樂へと小屋の前で別れた。謙ちやんの後姿が柳の木立の間に見えるなくなつてしまふのを見送つてから、いつもの徑を登った。今日は我慢出来る処までワツクスで登るつもりなので処々短いながらも急な登りにかゝると油断がならない。慈恵の小屋は一寸覗いた丈で、直ぐ下の芝へ続く登りにかゝる。シユポールがハツキリしてゐるので何の不安もないが、傾斜が加はつてくるにつれてメデイウムは利いてはゐるがともしれば後滑る。修業のためだと頑張ったが到々下の芝の有へもう一ト登りの処で兜を脱いでシールを張った。俄然楽になる。有まで登ると、十八九の女へ陽除け眼鏡をかけて、空身だった）が降りにかゝらうとして居た。

「神樂ですか」と聲をかけると

「いゝえ、中の芝まで」と答えたので折返して

「神樂へ多勢行きましたか？」ときけば

「何ですか二三人で雁の方へ行かれました」と

いふなり二本杖で制動しながら降ってゆく後姿は忽ち尾根の彼方に見えなくなった。下の芝の平地

を過ぎて中の芝の針葉樹林にかゝる処でウィンド
マツケに身を固めた年配の人と會ふ。此迎新雪相
當深く腰まで潜るのでシールでも寒じやない。稍
登るうち四五人のパーティが白銀の乱倒をやり乍
ら降ってきた。慈惠の小屋から出曉した連中らし
い。天気は朝からの曇天で先づ心配はない。やが
て見覚えのある上の芝に出た。神樂はもう見えて
ゐるのたが腹も漸く北山で行程却々捗取らない。
一時山頂。小屋から連続四時間の登高だ。こゝで
晝食のつもりだったが、流石に風が激しく、寒さ
も相當に厳しいのでじつとして居られない。密柑
とテルモスの紅茶で済ます。曇りながらも真近の
苗場の平頂。遠く霞む上越国境の連峯が白銀に輝
いてゐる。忽ちグエールをかけるかの様に雁ヶ峯
の方からガスが襲ってきて見る／＼中の芝も、清八沢
も押し包んでしまった。ビンディングを締め直し
て降りにかゝる。滑降は早いもの早下の芝の有だ。
リュックを卸して晝御飯だ。こゝは風も無い。神
樂のあたりはチリ／＼と来てゐるらしい。三時出
発、去年の春はスピードが出て困った此林間滑走
も、今日はさほどの事もない。すぐ慈惠裏のゲレ
ンデに出る。練習に餘念のない六七人連を後に通
ひ馴れた山路を外の川に帰った。
一月四日、素張らしい大雪だ。一晩で一米は降

つたらしい。夜が明けても盛んに降つてゐる。今
日は高石登りの豫定だがこれでは大ケしからうと
思ひながらも強引に外に出たがスキーのまゝ、胸の
辺まで沈んでしまつて両肘が雪面にとぐく深雪で
半丁行くのに十五分もかゝつて高石は愚か、會社
の連中との約束の水上降りも出来ぬ。終日の籠城
では堪らぬと思つてゐると、同宿の四五人連の慶
應の学生が小屋の前にゲレンデを作つて練習を始
めたので一緒になつてやつてゐるうちに、小屋の子
供達が小屋の裏に小一丁もある相當なゲレンデを
作つたので、午後から其方へ變つて時の移るのも
忘れて猛練習を続けた。あんまり熱心の度が過ぎ
て学生連が引あげてしまった後子供達と三人樹の
木立にナシヨナルランプを吊して七時迄夜スキー
をやつた御蔭でどうやらクリスチヤニヤの呼吸式
は吞みこめたが、一晩寝たら忘れやしないかと云
つて大笑になつた。
一月五日、愈々今日は山を降る日だ。小屋の子
供が二人で送つてくれる。慶應の学生連も一緒に
下るといふし、雪は一晩経つて餘程しまつて沈ん
でも一尺そこ／＼になつた上に、昨日慈惠の小屋
から降つてきた二人連が、先に降つたのでラツセ
ルの心配はなし朗に出かけた。八巻峠の降りも新
雪が深かつたばっかりに斜滑降もうまくいったし、

真中辺の杉林のばづれから流星の様に直滑降で降れたのも松木、近藤両君の仕込の御蔭だった。ゲレンデでは勇敢な慶應ボーイ連もこういう難場？にかゝるとまるで意気地がない。スポーツは何でもやうだが、殊に若い連中を仕込むには荒事仕込でなければいけないと思つた。特に一橋山岳部のリーダー連に考へてもらいたいことだ。三十分も学生連を待つて（去年松木に三十分も待たしたのには私だった）ハズに渡る。馴染の有馬屋で晝食こゝの猫に馬の様なソーセージを置まれかゝつて驚いた。こゝから芝原峠へのダラ／＼登りを、又慶應ボーイを引合に出すが、シールを張つてある。氣力が足りない！と痛感する。荷は三貫近かつたがワックスで楽に登れた。峠の上で暫く待つて、降りを楽しむつもりでゾームの赤を塗つたが、実は殆んど役に立たなかつた。それは峠からの急なジグザクの夏路の降りと、それに繞いた七谷切の即落を通る徑とは双方共に大雪の後の快晴で却つてカン／＼になつてゐたし、部落へさしかゝれば家の毎の雪卸しの雪ブロックはデブリの様に路を扼して、滑降を妨げるばかりか、まるでスピードを殺いでしまつて、峠から戻まで一時間で悠々といふ目算はがらりとはずれ、三分の二程も降つた頃、早スキー列車湯沢発の時刻になつてしまつた。唯

一俣の望は四日の大雪で相當まだ上り下り共遅延してゐるだらうといふことだった。さう思ひながらどうにかして間に會はしたいと懸命にスキーを走らしてゐると、登つてくるウインドヤツケをつけた男とすれ違つた。見れば今朝、二人連と一緒に下つた慈恵小屋の番人の和田喜太郎だ。
「今却降りですか？」といふ話から、雪で定期列車が三十分も遅れ、今出たばかりの処だといふので、其列車とスキー臨時列車との間隔を計れば、恰度遅れた又は取戻せるらしい。もう殆んど平地であまり走らぬスキーを懸命にとばす。峠路が線路に交叉してゐる発電所の角まで来ると、遙にヒーツといふ電気機関車の警笛だ。シマツタと左手の取を眺むれば、今しも上りのスキー列車は橋内に進入してくる。それを見るやスキーを脱ぐなり擔いで三四十間線路内と走つたが、舊關の揚句に荷は重し、足が動かない。二三歩、歩く途端に又警笛、乗破、発車と断念して、線路外に出ると、
「大丈夫、走れば間に合ふ！」といふ転撒手の聲に勇氣を得て泳ぐやうに走り乍ら、左手をあげて機関手を索制しつゝ、辛うじてホームに這上り、出合ひ頭の車掌に
「無改鉄で乗ります」と叫びながら前部車室に駆るやうに乗り込んだ。

え　　ひ　　ろ　　ぐ

汽車は却々発車しなかつた。それから十分も経つてから発車した。そして、岩原の假木一ハからは何百八といふ人達が無改鉄で乗ってきて、車掌が車内で改鉄してまわつたのだつた。

(七 兵衛)

無題

内容長短を不問との編輯者のお話。長短は適當の長さに切つて貰ふ。さて、うめ草の内容は何とせう。「私の恋人」と云ふのは如何だらう。私のラバサンは尊長の娘である。色は黒うても、南洋ぢや美人である。云々。これは余りパツとしない。いや、パツとし過ぎてゐる。こんな出たら目ぢや叱られる。

では、こんなのは如何だらう。時は大江戸の丑満時、闇から闇を縫つて、木鼠の様に駈けて行く一人の年若い男があつた。へ出は馬鹿に好いでせう。その男の名は、和泉屋次郎吉。その敏捷な行動から、人呼んで鼠小僧次郎吉。彼は一風変つた資賊であつた。當時の特權階級の武家の屋敷、富豪の邸宅を夜毎に襲ひ、無人の境に行くが如く荒し廻つては、その金を貪しい人達に恵んでゐた。江戸の町民はその徳を称へて、

義賊として陰ながらその活躍を快しとしてゐた。彼の胸中には權力に対する反抗の火は燃え、被圧迫階級に対する熱烈なる同情は——と余り書き過ぎては實はいけなひのだ。

不目、商工大臣にでもなつた時、貴族院に大岡越前守の子孫とか、或はえらいお奉行様の子孫が議員になつてゐて「商工大臣は隨筆次郎吉論に於て、彼の心事を高潔なりとして居られるのは如何なる理由によるか、かゝる卑賤に対して讃辭を與ふるが如きは國民思想善導上非常に遺憾なことである」と總入歯を飛ばしてカン／＼がク／＼の論を吐かれて敢なき最後を遂げる様なことでは困る。

こうなると、内容も余程吟味しなければならぬ。小心翼々、何れ様に対してもお差障りのない様にしてをかぬと大きなことになる。近ぢやんがヒットラーの様になつた曉、ペン公の書いたものは全部穴を掘つてその中へ埋めてよへ小便をしてをけとか、孫さんが偉くなつて、ペン公嘗てスキ一場で不穩の行動があつたからゲーペーウーの監視を嚴重にすべしとか、国外に放逐すべしとか承ては、妻子あるであらう身にとって何たる悲慘事であるであらう。

そこで私が此の頃ルンペン稼業へ稼業もおかし

いがしをしてゐて、方式の部屋にねころんでる話なら大して面白くもないが、無難だらうと思ふ。部屋は南へ向いて一間半の窓に障子が四枚、日は此頃なら朝の八時半頃から十二時頃まで射す。それは天気の良い日に限る、曇つてたり、雨が降る日は必ず日當りがよくない。午後から影になるのは、西に高い崖があるからだ。此の頃は天気の良い日が続くから、二枚の障子を開け放して幅四五寸の日光を十分に入れてその四角な日向に對角線にねころぶ。これは日向ぼつこの面積を成るだけ広くするのと地球の動くにつれて移る影を避けるのを余り要々せざるが為である。風は西側の崖の上を吹いてゐる、谷底は一寸も當らず、開け放して日向ぼつこをするのに理想的だ。さて、ねころんで、昨晚お風呂へ浴衣持って行って、五銭お釣をもらつて、帰りに、夜店の古本屋にその五銭をさじて購つて来た月運れの雑誌（月運れと云ふよりも寧ろ、運れと云つた方が好い）を開く。キング、婦人公論、新青年、科学知識、少年俱樂部、何でもかまわない。そして日光消毒をしながら頁を繰ったり、太陽の光線の強い時はスキーの色眼鏡をかけて眼を保護したり、衛生思想は可成り行届いてゐるつもりである。これを気の向くままに読む。古い雑誌丈けに書いてゐるこ

とも古い。尤も侯客々霧新三郎とか、ワイルドの戦とか、宮本武蔵とかはもと古い話だが、好いが、浜口雄幸氏が先月なくなつたり、大義民の不慮の死を悼んだり、新しい所で、日印會商代表の出発の寫真なんてのだから恐れ入る。だが新聞は比較的新しいのを読む。大抵朝刊か、遅くて昨日の夕刊。時々よると昭和五年頃の一橋新聞の黄色くなつたのが戸棚の隅から出て来て珍らしく眺めることもあるが、新聞も此頃は一時に比べて割に嘘を書かなくなつた。嘘かどうかは實際分らないが、そんな様な気がする。広告となると嘘は嘘なりに面白い。こんなことを書くと広告主から文句があるかも知れないが、記事は一度読むと、もう読む気もしないが広告となると色んなことを考へさせられて面白いものだ。広告で多いのは矢張り化粧品に藥。それに近頃はレコードの目立つて増えて来た様だ。百貨店となると、毎日必ず、何処かの店に出てる。百貨店のできが、ついたのは広告の輪廓が店によつて一定してると云ふことだ。三越のは黒の三角のウロコの連続で忠臣蔵を思ひ出すし、白木屋のは算盤玉。松坂屋のは四角く黒がヨの字形に続いてゐるし、高島屋のは太い黒線二本でアツサリしてる。松屋のは中に松を描いた半月が交互に並ぶ。伊勢丹は百貨店

組合に入つてなくて、八の日にも営業してゐる様に記憶してゐるが輪廓だけは百貨店並にきめてゐるらしく、白い半肉が二つ、小さなボツ／＼が二つ、それの連続である。

嬉しいのは水曜の夕刊の映画広告。

東京理財何とか會の投資五割配當のは、一時流れた金塊引揚や、金鉱発掘のと同じく、現代のインテリゲンチが表はれてゐて面白く、三行広告を見るのも、相當時代性が出てゐて、悪くない。この様に広告が忙しい時は全然見なくてすむし、閑な時は隅から隅まで何時まで、も見てらるから、割に便利なものと思ふ。広告する方の側から云へばこんな人間には読んで貰ひ度くないかも知れない。

(ペン)

日光行

學生、先輩合同のスキー懇親會を何処でやらうかと云ふので一月の初會では大分問題になつたが、去年から売出した日光は行った人も少いからと云ふので一月二十八日の日曜日日帰りで行く事に定めた。全部で十名で顔振れは中川御大、近藤、増山等いつもの御連中だ。

土曜の晩九時と云ふのに僕は八時頃に浅草に着いて一番乗りと思つてガラ／＼しながら売店に入

るともう近藤と堀岡が明日の晝食を仕入れてゐる。中川が来る増山が来る第一隊は先發で出ることになつた。學生はゼミナールの會などで最終で来ることになつた。電車はスキー客五十名位でなか／＼賑かた。スチームも猛烈に通つてゐるので凄く暖い。二時間余りで日光に到着すると馬鹿に寒い、粉の様な雪がちら／＼してゐる。下りると直正側に馬返行の電車が待つてゐる。これに乗り込むと日光の町の中央で皆が下されそこには指定の宿屋ニ軒が起きてゐて、皆がこゝに入つてしまふ。朝食付き半泊六十銭也だ。部屋は三階の三間をぶつ通しでおいこみだ。こりやたまらぬと女中を外交つて古家だが裏二階に一室をとつて貰つて僕達のみそこに入つた。風呂もある。風呂から上つて来ると十二時を過ぎてるのに食ひ氣にかけては負けぬ連中のみの事とて隣に鍋焼うどんと蒲焼のあるのは見落さなかつたので早速鍋焼を持つて来て貰つた。二つ食つたのが申す迄もなく堀岡だ。凄晴しいスピードを持つてゐるのは孫さんだ。

朝は五時半には出発だ。その時刻には宿屋の前に遊覧自動車が待つてゐて、スキーはトラツクに山積して馬返に行く、此処から直にケーブルカーで中禪寺湖に出ると数台の自動車が待つてゐる。東武のサービスはこの乗物のリレールの手順は行き

と書いてゐる。こんなにしなれば此の乗換の多い湯本にはなか／＼おつくうで来られはしまい。初め此からの自動車が噂によるドエライものだ。先づ車輪はチエーンがまかれてゐる。積みこんだ戦時用非常用具はシヤベルは勿論丸太に綱梯子だ。龍頭までは雪量も少いので難なく上ったが、名も戦場ヶ原に出るといや大変だ。なか／＼動かない、新聞の漫画が見た通り車道からはづれた車台を軌道に戻すには皆でよいしょくと押す騒ぎ。九時過ぎにやっと湯本に着いた。此処を自動車は無理なことばかりきつてゐるのだがそれが商売でこれを歩くのじやお客は半減いやそれ以下に減るに疑はない。

今日は今年に入つて初めての晴天ださうで全く晴渡つてゐる。昨日から坂屋に泊つてゐる十合、林、芳賀の若い者等とそろつて金精峠に向つた。ラデオでは毎日零下十何度と言つてゐる故何でも彼でもミックスだと東京から送つて来たらこのお天気じや駄目で上にメデウムをつけて登った。雪はよい。登るにつれて男体が玄脈に見えて来る。道は夏道通り中腹まで上り最後の橋を渡つてうんと上りにかゝる処で左へ急の谷を上りきるわけだ。この谷が馬鹿に狭いので階段登りでとても耐らず左の尾根を巻いて峠より少し上の処に上りついて

峠に下りた。峠には数年前に通つた時にはなかつた鳥居もあれば、お堂もある。そしてそのお本尊が石で一尺余に刻んだ逸物なんだ。ところがこの御本尊が時々なくなるんださうだから面白い。峠の北側は急に雪が多くなつてゐる。此処からは男体、大真子、小真子等黒木に包れて美しい。温泉岳の方は赤肌を露に崩れ落ちさうだ。熊はのしかかる様に直文してゐる。

下りは初めの中は谷が狭く面白くないが後は凄じい林間滑走で滑る／＼。十五分位でゲレンデに下りてしまった。皆そろそろと又下り出した面白い滑走だった。

帰りの自動車は四時に出るので三時に帰つて来て早く自動車に乗り込んでおたのほ達の乗つてゐるのは最も後廻しになつたのでいさゝか癪にさわつた。帰りの自動車ケールカー自動車、電車のリレーで帰つたのだが、此処に申述べて置き度いのは電車がとても愉快だったことだ。それは電車の中に長椅子を沢山持ちこんで両側の席と席の間に入れて此処に足を延して食つて飲んで帰つたことだ。夕飯は中川浅野セメント氏が六ヶ月か一年か知らぬが予想にたがわず千両近くの賞與にありついたらと云ふので、礼ビラきつて貰つた。併し御本人に言はせれば何のあんな汽車弁などおごつ

たのだと思はれちや困るとおつしやることに違ひない。ありつくなら早い内ですぞ。

(松 木)

富士スキー行

二月二十五日

會社のスキーファンの一人が頻に三ツ峠へ行こうといふので、あの馬鹿尾根を吉田まで降るのも一興だといふ誘はれて赤城行を三峠に変更した。大月で四、五十人は降りるかと思の外、一行三人の外にタツタ三人、連絡の富士山麓電車は運転中止、バスで間に合はせてゐる。新聞と相乗りだから面白い。吉田に着いたのが午前三時四十五分、三峠登山口を通る国道バスとの連絡を訊ねると、一番が七時半です。とのこと、こんな処で三時間半も待たされたのでは折角夜の目も寝ずに出かけてきた甲斐がない、山麓中の茶屋行のバスが直ぐ出るといふのを幸ひ忽ちそちらへ転向した。一それが非常によかつたことは夜が明けて間もなく判明した。中の茶屋からスキーを肩に、凍てついた平地の様な登山道をゆく。雪はあるにはあるが、僅かに十種位なもので処々大地が肌を出してゐる上にカン／＼にクラストしてゐる。耳がちぎれるやうに寒い。五時、大石茶屋を起して上り込

む。甘酒をすゝつたり、餅を食べたりしてゐるうちに夜は漸く明けはなれたが、西空には曉の明星の名に背かず、金星が鋭く輝いてゐる。暫く行くと馬返だ。池谷佐重氏の桂屋が戸を開けてゐる。炉端に上りこんで朝食にとりかゝる。聞けば富士山は今冬になつて降雪僅かに三回、二月半頃のが最近だといふのだから、陽に照され、富士雲に吹きさらされカン／＼になつてゐるのも無理はない。馬返ゲレンデなどは、難木は無論のこと、茅、いばらの類までが顔を出してゐる情無さ。試みに夏路で滑つてみると、制動も何もあらばこそカラ／＼シヤーツとまるで伊勢丹か山王だ。相変らず擔いだまゝ登る。五合目まで登つて帰りは小御嶽スロップとやらを降るつもりなのだ。登りながら何心なく吉田の方を眺めた途端にアツト驚いたのも當然、何と三峠は頂上まで一面のカヤトで一片の雪も無い。七時半の国道バスを待つてゐたら今頃は爲が「アホー、アホー」と鳴いたらう。二合目をや、過ぎる頃から嬉しや少しは雪が多くなつてきたので、シルを張る。寝不足で変に登りが辛い。三合目辺から、秩父、ハケ岳、南アルプスの銀冠をいたゞく雄峯が指顔の間に望まれた。わけても赤岳、駒、北岳は鋭いスカイラインを画いてそゝり立ってゐる。ハケ岳、南アルプスを前景に、遙

か彼方に裾引く白雲と見送ふは北アルプスの連嶺、一きは高く天の近隣の如く天空にぬきんでてゐるのは磐ヶ嶽であらう。こゝは風もなく、一片の雲もない快晴だが、耳をすませば、頂上のあたり裏奥の響は剝の烈風の吹える音だらうか。暫く登つて右手の木立に「小御嶽スロープ入口」とあるのに氣を引かれて入りこめば、森林帯とてさすがにがらめ雪、や、怪らしい処を登るうち燕沢に臨む断崖上に行詰り、アツサリ退却し、又夏路を行く。此辺で四五人の客を案内しながら五合目の自かの小屋にゆく佐重と一緒に。十一時、漸く佐重の小屋に着く。先づ焚火だ。大鍋に一杯の雪がみる／＼融けてゆく。此辺、家の中で零下八度、寒い日は十四五度だろうだ、高距約二千米、晝食の後、明日頂上を目ざす某君と、佐重に別を付けて他人も加えた一行五名、小屋の直ぐ上から右手の森林中に拓かれた径を傳つて小御嶽スロープに向ふ。時に十二時十五分。雪は相変わらず少く、木ノ根、岩角に容赦なくスキーを虐む。漸く燕沢に降ればこゝはウインドクラストでバリ／＼だ。シュプールは沢を渡つて又森林帯に入り込んでゐるのでそれと古い鈍目をたよりにしばらく緩スキーを続けてゆくうち、俄然眼界開けて小御嶽スロープの頭に出た。成程グレンデには相違ないが、恰度

海老の背中の様な細尾根で、雞爪成り拂つてあるが手に餘つた襞、唐松の類は下枝を取払つた丈で二抱もあらうといふ巨体が子とろ／＼の鬼の様に要所／＼につつ立つてスキーヤーを待ち構えてゐるといったスロープだ。そこへもつていつて意地悪く切株は額を出してゐるし雪面はクラストしてゐるから堪らない。グレンデで鍛えてきた連中忽ち悲鳴をあげて一斉に腎面制動を開始、七転八倒しながら降りてくる。そういふこぢらなどうかといふと、こゝで又松木、近藤両氏のは込に改めて感謝する次第だが、放制動の要領宜敷を得て三転四倒程度で断然優秀な成績でトップだ。他流仕合の荒仕事になると俄然威力を発揮するのが針葉樹流らしい。富士山麓電車大童の宣傳も此スロープでは假に雪は多くても、又新雪があつたとしても、此細長く、等傾斜の斜面を降る一方ではあまり快適なスキーではない。仲間の一人、倒々クラストに開口してジールを張つて降る。(鹿沢ではシルを逆に張つて歩いて降りたといふ豪傑があつたさうだ)二時、漸く此スロープの二合目辺の小屋に鞍がり込む。こゝから斜面は急にゆる／＼なつたが、同時にカン／＼になつて全制動でも相當に走つた。馬込から夏路を放制動の心配もなく始めて快適なスピードで滑走することが出来た。

追記

堀岡は富士スキーの禮賛者だが、勸められて登った私の感想では、登頂の手段としてのスキーは面白いかも知れないが、ツアーの対象としてのスキー地としてはどうかと思ふ。

(浩一郎)

豫科山岳部だより

一年一年と部員が減って一昨年は僅かに二名といふ状態に陥りましたが、小平後転と共に、再び往年の隆盛にもどりさうになって来ました。只今豫科部員は十四名居ります。山に入る人数も段々増して来ました。奥日光、奥秩父、谷川、富士など小さい山行ながら歩いて居ます。夏の徳高、冬の五色など、未だ満足できませんが今後が期待できそうです。

小平は国分寺と村山貯水池の間にあります。武蔵野の雑木林の真中で、附近には、津田英学塾の外、二三の農家が点在するばかりです。春暖かくなりましたら、散歩がてら豫科をお訪ね下さい。御葉書さへ戴けましたら附近御案内の用意をしておいて居ります。尚本科の部室まで約一里程あります。

(琢)

吉澤氏轉勤

吉沢一郎氏此度、廣島市針屋町十五、太平生命保險廣島支社へ転勤なさいました。新住所左の如くです。

廣島市中廣町八七一

△△△

今度も相変わらず原稿集らず非常に苦心しましたが、一度八方に檄を飛ばしましたら、流石に針葉樹會員です、中川孫さん初め、御多忙のところ大いに筆を振ってくれました。また村尾大兄も久し振りに流麗(コンナ)言葉はあるかしら)たる一筆を御投稿に預りました。何れにして山有難き事です。猶カット目新しいものを是非欲しいのですが、却送付がありませんので不敢取、間に合せを掲載しました。原稿、カット面ながら是非／＼お願い致します。

(小川)

△△△

文運社 印行

東京市麹町區飯田町一〇二